

News Letter



ヘリヒラタアブ (山梨県、櫛形山)

空を飛ぶ生き物には、どのような生き物があるだろうか。

まず最初に思い浮かぶのは鳥の仲間であろう。鳥の仲間は、空を飛ぶための器官である翼を最も機能的に進化させ、大空をその行動範囲として獲得した最も栄えている動物といっても過言ではない。

では、鳥以外の空を飛ぶ生き物にはどのようなものがあるだろうか。動物に限って考えると、空を飛ぶための器官を持つ

た動物は意外にも少ないのである。鳥以外に空を飛ぶ為の器官を発達させた動物としてはコウモリがあげられる。翼手類ともいわれるように、コウモリの翼は前肢(手)にある皮膜が発達して飛ぶための機能を発揮している。

その他、忘れてならないのが昆虫類である。昆虫類は陸上に植物が進出した後、最も早く陸上に現れた動物ではないかと考えられるほど、その歴史は古く、おそらく、空を飛ぶ器官を最も早く手に入れた動物である。実は、飛ぶための器官を



クマバチ (長野県、望月町)

持っている動物は今までにあげた鳥とコウモリと昆虫類だけなのである。

これらの他、爬虫類、哺乳類、両生類の中には皮膚が変化した皮膜を持ち、空中を移動することができる生物が知られている。また、魚類では鰭を広げて水面近くを飛ぶ種が知られているが、これらは滑空と呼ばれ、自らの力で空中を上昇することは出来ない。また、クモ類は自ら出した糸を利用して風に乗って移動するが、これも自らの力だけで飛んでいるとはいえない。

このように、空を飛ぶ為の器官を発達させた動物は限られているといえる。自らの意思で飛ぶことの出来る生き物が手に入れた最大のメリットとは何であろうか。それは、環境に対する適応力と広い分布域であろう。普段、何気なく観察している鳥や昆虫類も、視点を変えてみると、それまでとは違った発見があり、実に楽しいものである。

(東京本社自然環境研究室・伊藤 透)



スズメ (東京都、上野公園)

空を飛ぶ

目次

エッセイ	空を飛ぶ	1	Report	ESRIユーザーカンファレンス2003参加レポート	5
調査	植物相調査 番外編	2	話題	「複合的連携」と「協議会方式」の重要性	6
マンガ	調査員物語	4		ある日のフィールドノートから 雑木林の異邦人たち	8